



## 沖ノ鳥島にサンゴ里帰り

以前紹介した沖ノ鳥島で、いよいよサンゴの移植が本格的に始まります。同島から採取したサンゴの卵を沖縄県阿嘉島で人工増殖させた、10万株の稚サンゴを海に戻すことが決まりました。

東京から1740キロ離れた沖ノ鳥島はサンゴ礁でできた島で、排他的経済水域の基点となる重要な島ですが、ほとんどが水没しています。

海面上に残る2つの小島は護岸設置工事がおこなわれ、かろうじて維持している状態です。この移植が成功することにより、国土保全や水産資源確保に大きく貢献することになります。

このようにサンゴを取り巻く厳しい環境の中、サンゴ礁再生の努力も少しずつですが実を結んで

います。これからもわかり次第、いろいろな取り組みを紹介していきます。



写真右/沖ノ鳥島観測所基盤を利用したヘリポート。奥に見える建物は無人の観測施設。  
写真上/上空から見た沖ノ鳥島。  
手前の丸の中に見えるのが北小島（東京都小笠原村沖ノ鳥島1番地）左奥の丸の中に見えるのが東小島（東京都小笠原村沖ノ鳥島2番地）。

## 飲用水に医薬品残留 厚生労働省、7浄水場調査

大都市圏の浄水場の水から少なくとも25種類の医薬品が検出され、一部は飲用水にも残留していることが、厚生労働省の調査で分かった。環境省の研究室も、利根川、淀川で、医薬品50〜60種類を確認した。

研究者らは、飲用水への混入はごく微量で、人の健康に直ちに影響はないとしながら、生態系への影響を懸念している。

国内で飲用水への医薬品残留が明らかになるのは初めて。厚生省はさらに3年かけて、詳しく調査する。

医薬品は、人や家畜から下水を通して環境中に排泄はいせつ）され、医療機関の排水からも流出している。

厚生省水道課や国立保健医療科学院などは06年2月と07年1月に、関東、関西地方の7浄水場の水で、約60種類の医薬品成分を対象に残留の実態を調べた。

この結果、各浄水場から、抗生物質、X線造影剤、抗アレルギー剤など、あわせて25種類が検出された。

浄水処理の過程で、残留濃度は下がったが、3浄水場では、抗高脂血症剤、解熱鎮痛剤、抗てんかん剤の3種類が、飲用水にも残留していた。

残留濃度は6〜30ppb（1ppbは1兆分の1）で、単一なら、体重50キロの成人が70年飲み続けても、健康への影響はまず心配ない値だった。

ただ、大半が、欧州連合（EU）が環境への影響評価を義務付けている10ppbを超えていた。

厚生省は、現時点では「直ちに対応が必要な濃度ではない」（水道水質管理室）としている。だが、国内で流通している医薬品成分は約2800種類あり、今後も3年計画で、医薬品の対象、時期、地域を広げて調べる。

国立保健医療科学院の国包（くにかね）章一水道工学部長は「人への急性毒性は心配ないが、長期的影響、生態系への影響を解明する必要がある」という。

一方、環境省の研究室（班長、田中宏明・京大教授）は

### 海の恵み、サンゴから生まれたカルシウムパワー

携帯用浄水ミネラルパック  
「さわやか」



持ち運びに便利な携帯パック。さわやかは1リットルの水に1包を目安にお使いください。炭酸カルシウムやマグネシウムなどの必須ミネラルが豊富なお水が、簡単につくれます。ご飯やスープのあるお料理、お酒にもご使用いただけます。

内容 アルミパック10袋入り（1袋内容1g×5）  
成分 サンゴカルシウム 99.43%  
ビタミンC 0.5% 銀 0.07%

1箱（1g×5包×10袋） 1,680円（税込み）  
お得な30袋入り「さわやか30」 4,725円（税込み）

05年から07年11月まで4回調査し、利根川と淀川の下水処理場の放流水や支流から、胃腸薬、抗精神病薬などそれぞれ54種類と63種類の医薬品を検出。最高で2000ppbの濃度だった。

これまでに、環境省研究室などの実験から、医薬品による環境汚染で、生物が成長、増殖を阻害される危険性が確認されている。微生物が薬剤への抵抗力を獲得する可能性も指摘されている。

米国は98年、EUも06年に新薬の開発や販売申請で、環境への影響評価も行うことを指針で義務付けている。

厚生省も、新薬開発で環境影響評価が必要か、検討を始める。環境省は生態系への影響がないか調べるほか、国交省も河川などで残留の実態を調べる。

すでに環境省の研究室は、オゾンや紫外線を使い、浄水場で大半の医薬品を9割以上、除去、分解できる技術を開発しており、実用化に向け検証中だ。

【2007年12月23日朝日新聞】